

私たちの先生を紹介します

心理臨床学科障害児心理専修3年
山下悠太(やました ゆうた) 富山県・八尾高校出身
山口智子先生

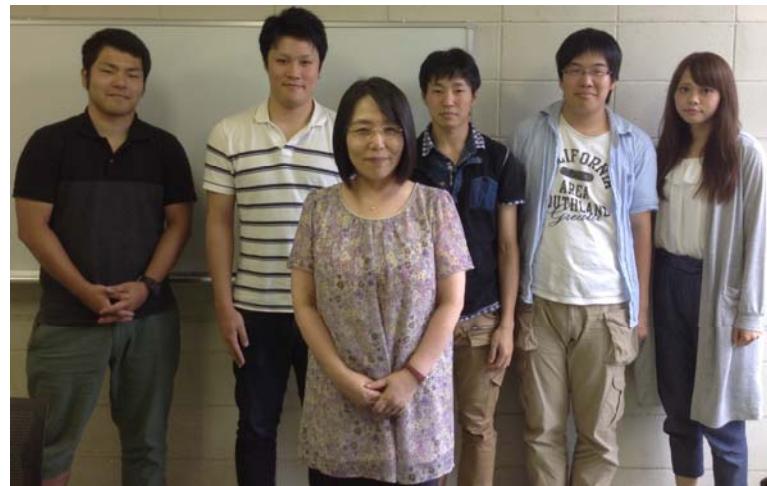
山口ゼミのテーマは「生涯にわたる発達を学ぶ一働きと老いること」です。山口先生の専門は臨床心理学と生涯発達心理学ですが、前期は『問いからはじめる発達心理学』を教科書とし、ゼミ生5人で役割分担をして、読み進めています。各章に3、4問のクエスチョンがあり、学生が話し合うものを選び、「友人関係と恋愛関係はどこが違うか」などを話し合い、発達への理解を深めています。

私たちのゼミには、他のゼミにはないのではないかと特徴があります。それは授業始めに行う一分間スピーチです。これは何を話してもいいのですが、ゼミ生の心の壁を取り払い、回を追うごとに、ゼミ生に繋がりが出来て、より素直で飾らない意見が出やすくなっています。私たちは、ゼミ生5人という他のゼミに比べれば少人数ですが、私は、ゼミ活動を通して、少人数であるほうが良い討論が出来るのではないかと思うようになりました。大人数であれば、様々な意見を取り入れる事が出来るかもしれませんが、今日は当たらないと思うなど集団の中で自分の重要性があまりないと感じるかもしれません。その点、私たちは、毎回、全員がフル活動して、納得できるまとめができています。

しかし、ただ単に少人数であるだけで、良いゼミ活動が出来ているとは思っていません。そこには、ゼミ

生5人の一人ずつの個性が活動にとっても強く影響しています。一人はリーダー気質があり前期ゼミ長としてゼミをまとめ、一人は哲学に興味を持ち様々な物事を結びつけて話すのが得意であり、一人はレジュメをまとめる事が得意であり、一人は唯一の女性ゼミ生として毎回違った視点から意見を述べてくれ、一人はとにかく考えが浮かぶとどんなことでも発言してくれる。

この5人の個性とそれぞれの個性を認め合う姿勢があってこそゼミ活動が深まります。そこに、ゼミ生一人一人の意見をそのまま流さず真摯に受け取って考えてくれる山口先生がいます。ゼミ生と先生が毎回全力で取り組む、これが山口ゼミの特徴であり、良さであると思います。



心理臨床学科障害児心理専修3年
太田茜(おおた あかね) 岐阜県・斐太高校出身
倉掛 崇先生

4月から、倉掛崇先生(専門演習Ⅰ)のもとで、メディアやコミュニケーション、そして、それらによって作り出される文化や社会について学んでいます。

倉掛先生は、昨年度までは全学教育センターに所属し、全学の情報処理教育を担当されていましたが、今年度から私の所属する「こたつ」の心理臨床学科へ移籍されました。つまり、私たちが先生の初めてのゼミ生、倉掛ゼミ1期生になるわけです。

私たちのゼミは、学生が5人と少人数なこともあり、先生は、「みんなで話し合いながら作り、進めていくゼミ」というのを大切にしてくれます。あと、先生は、基本的にはとても真面目ですが、心配性なところと、たまに抜けているところがあります。

倉掛先生は普段、メディア/コミュニケーション、ICT(情報コミュニケーション技術)の社会的な意味を考えておられるそうです。ゼミでは、私たち学生にとって、身近な存在であるスマホを歴史的に振り返ってお話をされたりもします。スマホが登場する前のメディア、たとえば、ガラケー(携帯電話)や、さらに昔のポケットベルのお話を聞いて、とても驚きました。先生が高校生の頃には、



「ベル」が恋愛のための重要なコミュニケーション・ツールだったとか(笑)。

このように先生は、学生を指導される立場でありながらも、私たちと同じ目線で話をしてくださるところがとても魅力的で、毎週のゼミが楽しみです。現在は、メディア論の本を輪読しながら、さまざまなメディアが社会のなかでどのように形作られていくか、また、私たちがそれを活用して、どう社会を良い方向に変えていくことが可能か、などについて学んでいます。

私が将来目指している特別支援教育の分野でも、ICTやメディアの活用を求められる場面が増えているそうです。今後、2年間の倉掛ゼミで、自分の将来の仕事にも役立てていけるような研究をしたいと思っています。



美浜町奥田保育所で子どもたちと粘土遊びを楽しむ学生たち 7月27日(月)

この号の主な内容

- オープンキャンパス企画スタッフとして参加しました 1
- 学部長からのメッセージ
- 学生主体で運営 新入生セミナー
- 美浜の海で貝ひろい 保育学基礎演習 2
- 充実のゼミ合宿 橋本ゼミ
- サークル紹介:聴覚障害者問題研究会「加絵手」とフォークソング部 3
- 教員紹介:山口智子、倉掛崇 4

We Love こたつ

— 日本福祉大学 子ども発達学部ニュースレター —

第15号 2015年12月1日発行

くしゃ染、きらきらシャボン玉づくりのオープンキャンパス企画にスタッフとして参加しました



子ども発達学科保育専修1年
北川愛珠(きたがわ まなみ) 愛知県・名古屋大谷高校出身
8月16日に行われたオープンキャンパスで保育専修の模擬授業にスタッフとして参加しました。この授業では「くしゃ染め」

「きらきらシャボン玉」の制作をしながら、保育とは何かを学びました。暑期中多くの高校生がこの企画に参加してくれました。

くしゃ染めは、美浜キャンパス内で採れた「やまごぼうの実」を使い、和紙を染めました。これは、水で濡らした和紙とやまごぼうの実を袋の中でもみほぐす簡単な遊びなので、何歳からでも取り組むことができ、袋に入れるやまごぼうの実の数や、水の量により色の変化を楽しめます。また、きらきらシャボン玉は、細く切ったプリズムテープを竹ひごやパンチラベルに張り付ける細かな制作のため、高校生の真剣な姿が見られました。くしゃ染めに比べて少し制作が難しく、中には苦戦している高校生もいましたが、完成した時の表情はとても暖かく感じました。

今回の授業の中で「子どもは遊ばされるのではなく、子ども自身が足りるまで遊ぶ」という言葉がありました。遊びは年齢によって様々であり、子どもが自ら遊びを作り出すことも多くあります。高校生のみなさんが、遊びとは何か、保育とは何かを考えるきっかけの一つとなっていたらいいなと感じます。

「ふくし」のセンスをそなえた保育・教育・心理職を

学部を創設して8年たちました。他大学にはない本学ならではの特徴は、「ふくし」のセンスをそなえた保育・教育・心理職の養成です。教職インターンシップ、教育実習、ボランティアなどでは、異口同音に「さすが福祉大学の学生さんですね」と評価いただいています。卒業生たちもまだ卒業後2~3年にも関わらず全国規模の研究集会で報告するまでに育っています。10周年、20周年にむけて、さらに充実した教育をすすめていきたいと思っています。

子ども発達学部長 山本敏郎



学生主体で運営した新入生セミナー

心理臨床学科心理臨床専修2年

羽佐田愛友(はさだ あゆ) 愛知県・一色高校出身

日本福祉大学では新入生が入学したばかりの4月、初めてだらけの環境に早く慣れ、友だちをつくることのできるようにと学部ごとに新入生セミナーを開催しています。今年のセミナーは4月23日に行われました。セミナーは子ども発達学部の2年生が計画し、運営しました。私はセミナー実行委員長を務めました。当日は午後の3時限と4時限を使い、ゼミ別対抗でさまざまなゲームやレクリエーションを行いました。点数制で、上位ゼミには少しですが景品を出して、かなり白熱した戦いになりました。初めは遠慮がちだった応援もだいに熱を帯びていきました。

私たち2年生も、昨年のこのセミナーをきっかけにいろいろな地域から集まってきた学生と友だちになることができた経験から、実行委員には進んで立候補しました。そして、限られた時間の中で少しでも新入生に楽しんでもらえるようにと昼休みや空いている時間を使ってたくさん話し合いをしました。

計画の遅れから実行委員を再募集することになり、先生方にも助言をもらいました。セミナーを無事に終えるまで本当にたくさんの人に迷惑をかけてしまいましたが、実行委員全員でつくり上げたセミナーを成功させたことで、新入生のためだけでなく、私たち2年生の成長にもつながったのではないかと思います。



充実したゼミ合宿 橋本ゼミ

子ども発達学科保育専修3年

小池ひろみ(こいけ ひろみ) 愛知県・東海学園高校出身

橋本ゼミでは、「保育者・教師の育ちと園・学校づくり」をテーマに勉強しています。園・学校経営に関わる文献を読んだりDVDを見たりして、自分の意見を考え、それをゼミの議題として討論し、自分とは違う意見や考えを知ることにより一層学びを深めてきました。ゼミでの討論の後には、みんなで食事に行ったり、また、研究課題から離れゼミの仲間や先生と一緒にバスケやバレーなどのレクリエーション大会を開催したりして親睦を深めています。

ゼミ合宿では、「根っこの保育」を実践している福井県の保育園で一日実習をしてきま



美浜の海で貝ひろい 保育学基礎演習



子ども発達学科保育専修2年 深田麻衣(ふかだ まい)

石川県・野々市市倫高等学校高校出身

海についてすぐ、クリアファイルのような素材のものと画鋸、わりばしで風車を作りました。そして作ったものを持ってみんなで海岸を走り、風車がクルクル回るのを楽しみました。次に貝殻拾いをしました。様々な貝殻があることを実感しながら子どもの頃に帰ったように夢中で探しました。そして最後に松川先生のご指導のもと、みんなで大きな円になり、「キャンプだほい」をしました。海岸ということもあり、開放感と爽快感の中、みんなで盛り上がることができました。いつもと違う空間での学びは、とてもいい時間になりました。

保育学基礎演習は、2年生を対象とした授業です。3年次からの専門的な演習(ゼミ)を受講する前に、基礎的なことを演習形式で学びます。1クラス25名ほどに分かれ、保育についての知識や技術を学ぶ場です。

10月14日(水)3限に海へ行きました。12月に子育て支援の場で、親子でたのしむ「かざりづくり」をします。そのための素材集めとして、保育学基礎演習で、海に貝殻をひろいに行きました。海の風にかかれ、たくさんの貝をひろう教材準備に参加し、教室の授業では味わえないと感じる時間になったと思います。(子ども発達学科准教授 塩崎美穂)

した。「根っこの保育」とは、保育者が意図するとおりに活動を行わせるものではなく、子どもたち自身が周囲の環境に働きかけ、自分で工夫したり、考えたりする力を発揮することを大切にしている保育です。ですから、保育園の園庭には一つも遊具はありませんでした。しかし子どもたちは、自然の素材にとっても興味を示し、好奇心旺盛に工夫してのびのびと遊んでいるその姿は野性的でたくましく、とても輝いていました。こうしてこの園の子どもたちと一日一緒に過ごしてみると、実際の保育現場の様子を感じ取ったり、保育者の方々からお話を聞くことができたりと、机上での勉強では得ることの出来ない多くの事を学ぶことができました。また、東尋坊や恐竜博物館を回り、アイスクリーム作りも体験するなど充実したゼミ合宿を送ることができ、とても良い思い出ができました。

今後、卒業論文の作成を視野に入れて、各自で研究課題及び方法を決定し準備を進めていきます。自分たちがどのような保育者・教師になりたいのか、クラス・学級運営、また園・学校運営をいったいどのようにしていくのか、ゼミを通して様々な角度から追及していきたいと思っています。

聴覚障害者問題研究会 “加絵手”

心理臨床学科障害児心理専修3年

伊東夏実(いとう なつみ) 愛知県・西陵高校出身

I部聴覚障害者問題研究会“加絵手”に所属しており、聴覚障害学生の情報保障であるノートテイクや手話通訳のボランティアをしています。ボランティアを始めたきっかけは、聴覚障害学生と友達になったことです。

障害のあるなしに関係なく、ただ友達が欲しかった私は、入学式の翌日に行われた障害学生オリエンテーションのときに聴覚障害学生にメールを送り、友達になってもらいました。聴覚障害学生との会話の中や加絵手で身につけた手話で少しずつスムーズに会話ができるようになり、今では親しい友達になることができました。

その友達と、いつでも同じように情報を共有したいし、楽しいこともつらいことも一緒に感じたいです。ボランティアを始めようと思った原点はそこかもしれません。

この2年間、手話を覚えたり、ボランティアをやったりしてきて思ったのは、自分は聴覚障害学生のために手話を「覚えてあげている」ボランティアを「してあげている」のではないということです。

大学に入ってから手話をはじめた私ですが、手話は私に

フォークソング部を紹介

心理臨床学科4年 道端真結花(みちばた まゆか)

長崎県・大学入学資格検定取得

フォークソング部は、軽音楽サークルで、自分たちで行う年7回のライブイベントや学生プラザで行うストリートライブをみんなで盛り上げています。また、同じ音楽サークルのラテン音楽同好会とブルース研究会Ⅱ部の方々と一緒に3部合同ライブも行っており様々な音楽を聴く機会がたくさんあります。現在は約40人の部員で活動しており、楽器初心者や音楽が大好きな人、機材にこだわっている人、黙々と楽器を弾いている人などいろいろな人が集まるサークルとなっています。そのような仲間たちの中でメンバーを集めていろいろなバンドを自由に組み、イベントへ向けてバンドのまとまりや個人の演奏力を高めていきます。名前には「フォークソング」とありますが、今はロックやパンクが多く、邦楽から洋楽まで様々なコピーバンドを練習しています。イベント前日は自分たちでブチステージを作って、PA機器も準備して本物のライブのように仕上げます。

ライブイベントは1日または2日間行い、多い時には全部で60バンド近くになることもあり朝から晩まで音楽三昧の日となります。みんなが積極的に参加してくれるおかげで、夏は全員汗だくで、冬でも暑いくらいに盛り上がるイベントができています。一緒に泣いたり笑ったり、音楽に熱くなりすぎて、少し羽目を外してしまうこともあります。それだけ音楽が好きで集まっていることを物語っていると思います。

ライブイベント終了後は、自分たちで作ったイベントが無事に終わることができた達成感と終わってしまった虚しさが残る感覚は、ほとんどの仲間たちが経験しています。それを繰り返しながら、一度

とって、とても大切な言語、欠かすことのできない存在となっ

ています。ボランティアも、友達が困っている、何かできないことがあるときに、純粋に何か助けがしたいという気持ちでやっています。これは障害の有無とはまったく関係ありません。この大学のように、ボランティアのしやすい大学はそう多くはないと思います。

「してあげる」「してもらう」ではなく、同じ情報をみんなで得られるように、これからも頑張っていきたいと思っています。



きりのイベントでより満足な演奏ができるように努力し、仲間同士の関係もぶつかり合いながらより濃いものへと変わっていきます。そして、フォークソング部が、ひとつの大きな家族のような場所にどんどん成長して、3月の卒業ライブの頃には4年生との別れも惜しみつつ、また新しい家族が増えることを楽しみにしています。

いろいろな人がいて個人の音楽の好みも違う中で、自分の好きな音楽を集めたメンバーでやり遂げられることに音楽の人を繋げるパワーを感じます。コピーバンドであっても本気で歌に演奏に気持ちをぶつけ、へたくそでも本物のアーティストの演奏とは違っていても一生懸命演奏している仲間たちの姿がとても誇りに思います。一人でも音楽はできますし、バンドをやることで難易度が上がるのは間違いないですが、一緒に演奏してくれるメンバーがいるので緊張も半減し、楽しさは何倍にもなります。なにより大好きな音楽を誰かと共有できたらすごく嬉しいです。そんな個性集まるフォークソング部で、卒業までいろいろな人と仲間たちと音楽を自由に楽しみたいと思います。

